

令和7年度入学 社会福祉学部 学校推薦型選抜（一般／専門高校・総合学科）試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	橋本 和明	怒りを考える 形なき感情の＜暴発＞から＜共有＞へ	『臨床心理学』23巻・1号 2023年 pp.3-5より 一部改変	金剛出版

社会福祉学部

小 論 文 (90 分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は、3 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
3. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
5. 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
6. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
7. 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
8. 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

この世はさまざまな怒りに満ちあふれている。それは今の時世だからというわけではない。人間が生きていくなかには、歓喜もあれば、怒りも生じてくることは言うまでもない。そのため、われわれはそれを見ていくわけにはいかず、うまく折り合いをつけていくことが求められる。

しかし、近年見聞きする怒りの光景はあまりにも露骨であり、その怒りをどう受け取っていいものやら困惑さえ覚えることが多い。例えば、ヘイトスピーチやヘイトクライムはその最たるものと言えよう。それをする当事者は怒っていることに間違いはないが、そこに憎悪の感情を伴って攻撃性をあからさまに表出している。果たして、このようなものは単純に怒りと呼べるのだろうか。われわれは、どこか怒りの範疇を超えてしまったものをそこに見てしまい、違和感すら覚えてしまう。

それ以外にも、不可解な怒りの表出は確かにさまざまなところで見られる。SNS の書き込みによってネットで炎上するという現象を取ってみても然りである。あそこまで過剰な批判をする必要があるのかと思わなくもない。誹謗中傷がある特定の対象に向けられ、それらの怒りをぶつけられた者は傷つきを通り越して、時には自死にまで追いやられてしまうのである。

しかし、ここで冷静に立ち止まって考えてみたい。上記に挙げたヘイトスピーチやヘイトクライム、SNS での誹謗中傷などのいずれの怒りであれ、怒りの表出者はその怒りをぶつける対象に当初からその感情を抱いていたのだろうか。言い方を換えれば、何か正体がわからぬ怒りが自分のなかにわいていて、しかもそれをうまく表出できない。そのとき、たまたま目の前を横切った対象にこれ見よがしにその怒りをぶつけているようにも見える。今の世に蔓延する過剰な怒りの正体はこのような構図が当たらずとも遠からず存在するように思えてならない。簡単に言ってしまうと、自身の欲求不満や不充足感、葛藤など名状しがたいさまざまな心の動きを怒りに置き換え、本来はさほど怒りの対象にはなっていないにもかかわらず、ちょうど出くわしたばかりに標的にし、怒りの対象にしていることが多いということである。

(中 略)

怒りにはさまざまなレベルの質と量がある。ある個人のなかにだけある怒りもあれば、特定の家族や地域が持っている怒りもある。歴史を紐解くと、社会現象に伴うその時々起こった怒りも確かにある。それゆえに、怒りを持つ人物に近視眼的になっていたのでは怒りの正体はわかりにくい。その個人がどのような時代に、どのような環境に置かれたのかにも焦点を当て、俯瞰的にこの怒りがなぜ生じてきたのかを理解しようとしなければ、(1)怒りの本質が見えてこない。

怒りとは、一般的には心のなかの処理しきれないネガティブな感情と捉えられてきた。そして、人間はその怒りの処理に奮闘してきたと言える。時には、怒りは人間を地獄界の精神状態に追いやり、死後最悪の条件に転生するものと考えたり、^{おおかみ}狼、ユニコーン、ドラゴンなど、何かとてつもない扱いにくい乱暴な猛獣にもたとえられ、それをうまくあしらう猛獣使いのようになることが適切な対処法として求められた。言ってみれば、「怒りを鎮める」術を持つことが大切だとされたのである。このことは自分のなかの怒りを荒々しい生き物として外在化し、自分と切り離してそれを客体化して眺め、なだめる対処法であったと言える。

確かに、猛獣のような怒りは、いろいろなものを破壊したり、傷つけてしまうといった攻撃性と結びつき

やすい。しかし、それはやや視点を換えると、生きていく上で行動を活性化する源にもなるし、上記のように自己を客体化して捉えるきっかけにもなってくれることがある。さらに言えば、怒りがあるからこそ、それらを個人として抱えるだけではなく、家族や地域、社会ともつながることができ、そこに関係性が芽生えるとも言える。その証拠に、これまでわれわれ人間は自然災害、戦争、犯罪、差別など多くの問題に直面した時、そこに個人を超えた大きな怒りをたずさえてきた。特に、外敵に侵され、安全が脅かされる事態に直面した際、この怒りがないとやられてしまうことも少なくなかった。つまり、そのような難局に遭遇した時、家族や社会が互いに怒りを共有して乗り越えてきたのである。その怒りは必ずしも適応的なものだけではなかったかもしれないが、時には大きなムーブメントを起こす原動力になったのも事実である。そう考えると、怒りは決してネガティブな要素だけを持つのではなく、苦しみを互いに共有し、新たなものを生み出す再生の原動力にもなりえるのである。

(中 略)

さて、心理臨床における怒りに言及すれば、怒りはやはり扱いにくい感情、ネガティブな思考と捉えられることが多い。それゆえ、怒りの対処方法として、“鎮める”“収める”というテーマとなったり、アンガーマネジメントのように怒りを“管理する”心理療法が選択され、それらが主流になっている。

しかし、怒りが生きる上での原動力になったり、自分を守ってくれる存在のようなのだとすればどうだろうか。単に「怒りを鎮める」ことが、逆に原動力を低下させたり喪失を招いてしまいかねない。ましてや、その怒りが根源的であればあるほど、⁽²⁾もうひとつ別の怒りとの付き合い方を、私たちは学ぶべきかもしれない。

このような怒りの対処法について考えていくなかで、これまで人類が築いてきた文化を取り上げてみるのがヒントとなる。同じ怒りを持った者同士が築き上げ、それを共有するという1つの形が文化となる。文化を通じて、人々が抱える怒りも共有され、相応の仕方で対処することを学んできた。例を挙げるとするならば、それは詩であり歌であり、物語や絵画などであったりする。

ここで大事なことは、そうすることによって怒りを個ではなく集団で抱えてきたことである。怒りを暴走させずに、そして単に個人の憎しみとして吐き出すだけにとどまらず、適切に怒りを保持してきた。怒りを共有することで生きてきたのである。

しかしながら、現代人の怒りを見てみると、表出された怒りが誰とも共有されずに、宙ぶらりんとなっていることが少なくない。そして、自分の怒りが共有されないばかりに、怒りは単なる憎しみに置き換えられ、ますます行き場所を失った怒りが蔓延してしまう。それが結果的にはヘイトスピーチ、ヘイトクライム、SNSの誹謗中傷となってしまうのではないだろうか。

心理臨床の現場では、クライアントの怒りをセラピストがいかに共有できるかということが何より大切である。そして、アンガーマネジメントのようなプログラムを実施する際も、クライアントと一緒に怒りを共有するという作業が要となる。単に怒りのコントロールの仕方を身につければよいというセラピストの志向は、怒りの一側面を捉えてはいるが、怒りの多面性にも目を向けていかねばならない。

(橋本和明「怒りを考える 形なき感情の＜暴発＞から＜共有＞へ」『臨床心理学』、23巻・1号、金剛出版、2023年、pp.3-5より、一部改変)

問1 下線部(1)「怒りの本質が見えてこない」とあるが、怒りの本質は、どうすれば見えてくるのかを述べたうえで、怒りの短所と長所について、本文に即して 200 字以上 250 字以内で説明しなさい。

問2 下線部(2)「もうひとつ別の怒りとの付き合い方」について、作者の考えを述べたうえで、あなたの考えを具体例を示しながら 500 字以上 600 字以内で記述しなさい。